

二〇一二年 度 センター試験 漢文 解説速報

【問題講評】

文章は長さも、難易度もほぼ平年並みと言ってよい。問題数が増えて問七まで登場したのは初めてだが、その分一問あたりの配点は低くなった。設問は、基本的な句形を覚えていれば解けるものが多く、特に難しい問題はなかった。若干平易化したと言える。あとは、話の内容がきちんとかめれば、後半の設問にも答えられたらだろう。

文章の内容は、ここ数年続いた論説系ではなく、説話系の文章で、それを蘇東坡が語るといふ二重構造になっている点に、ちよつとひねりが効いている。最後にまるで落語のようなオチがついているのだが、そこに気がついたかどうかで、問七の成否が決まるだろう。

中国では、人が死ぬと冥官（閻魔大王の部下の冥界の役人）の前に引き出されて、大きな鏡に生前の悪事が映し出され、地獄行きの裁きを受けるという話は、授業中に話したので、なんとなくイメージできたと思う。ちなみに「牛黄（ごおう）」というのが、牛の胆石で、漢方薬の原料として有名であることを知っていたら、さらに理解が早かっただろう。

【設問解説】

さて、それでは箇々の設問について見てゆくことにしよう。

問1 なんと、二問とも直前講習でやったばかりなので、講習を受けた人は思わずガツポーズだったに違いない。

(1) 「未幾」は「いまだいくばくもせずして」と読んで、「いくらかもたないうちに」の意だった。よって⑤の「まもなく」が正解。

(2) 「交」は「こもごも」と読んで、「かわるがわる」の意だった。よって、そのまま②が正解。

問2 これは基本句形一発の問題。「為冥官所追議」の部分が「為A所B」（AのBする所と為る）という受身の句形であることには当然気がついたらはず。もうそれだけで①が選べてしまう楽勝問題だった。

問3 訓点が施されているので、そのまま読めばわかるやさしい問題。

「誠に罪有り、然れども亦た功有り」と言うのは、「罪はあるけど、功績もある」ということで、あとを読めば薬で何人もの命を救っていることを功績としてあげているとわかる。「贖う」というのが、お金などで罪を免れることで、「贖罪」という言葉も冬期講習で説明したね。だから、ここは自分の功績で罪をチャラにしたいと言っているわけ。よって、正解は②となる。

問4 空所補充問題に理由を聞く問題をからめた、ちよつと珍しい問題。

(i) まずは空所補充。蛇も牛も、同様のことを主張して、同様の判決を受けたということになる。授業で何度も強調したように、理由はたいてい直前か直後にある。ここは直前に「吏考驗するに、固より誣ひざれば」とあって、「取り調べたら嘘じゃなかったから」。何が嘘じゃなかったかというところ、何人もの病気を治したということ。だとすれば、当然判決は死刑の免除であつたはず。その意味となるのは、①の「免るるを得」しかない。

(ii) 右で説明したように、罪を免除された理由は、「黄」によって人の病気を治し、命を救ってきたことが評価されたから。したがって、正解は④であることは言うまでもない。

問5 さきに述べたように、理由を聞かれたら直前か直後を見る。直前には、その人が「妄りに亦た黄有りと言」つたとあり、さらに直後の冥官のセリフには「何の黄か之有らん」とあるので、ありもしない「黄」があると口からでまかせを言つて罪を逃れようとする態度に腹を立てたのだとわかる。よって⑤が正解。

問6 これもまた、基本句形一発の問題。「何黄之有」の部分が反語形「何A之有」（何のAか之有らん）であることはすぐ気づいたはず。もう、それだけで③に確定。

問7 落語のサゲに似たオチがわかったかどうかポイント。冥官に「人間に黄などあるものか」と言われて、「黄はありませんが、慚惶ならございます」という答えに、「黄」と「惶」をかけていることに気づいたかどうか。漢文における「音通」の話は、一年を通じて何度も話してきたので、ピンと来たと思いたいが、どうだっただろうか。選択肢を見ると、実は「黄」は「黄州」にもかかっていたのだなとわかる。正解は、④ということになる。

【書き下し】

東坡、元豊の間に御史の獄に繋かれ、黄州に謫せらる。元祐の初め、起されて登州に知たりて、未だ幾もせずして、礼部員外郎を以て召さる。道中偶、当時の獄官に遇ふに、甚だ愧づる色有り。東坡之に戯れて曰はく、「蛇有り、螫みて人を殺し、冥官の追議する所となり、法死に当たると。蛇前み訴へて曰はく、『誠に罪有り、然れども亦た功有り、以て自ら贖ふべし』と。冥官曰はく、『何の功なるか』と。蛇曰はく、『某に黄有り、病を治すべし、活かす所已に数人なり』と。史考驗するに、固より誣ひざれば、遂に免るるを得。良久しくして、一牛を牽きて至る。獄吏曰はく、『此の牛触きて人を殺す。亦た死に当たる』と。牛曰はく、『我も亦た黄有り、以て病を治すべし、亦た数人を活かす』と。良久しくして、亦た免るるを得。之を久しくして、獄吏一人を引きて至る。曰はく、『此の人生くるとき常て人を殺すも、幸ひにして死を免る。今当に命を選ずべし』と。其の人倉皇として妄りに亦た黄有りと云ふ。冥官大いに怒り、之を詰りて曰はく、『蛇黄・牛黄薬に入ること、天下の共に知る所なり。汝は人為り、何の黄か之有らん』と。左右交訊ふに、其の人窘しむこと甚だしくして曰はく、『某には別に黄無し。但だ些かの慚惶有るのみ』と。」

【現代語訳】

蘇東坡は、元豊年間に御史の獄に繋かれ、黄州に流された。元祐年間の初め、起用されて登州の知事となり、それからいくほどもせずして、礼部員外郎の地位で朝廷に呼び戻された。その上京の道中で、たまたま当時の裁判官に出会ったところ、彼はとても恥じいるような表情をした。そこで東坡は、彼をからかって、次のようなことを言った。「あるところに蛇がいた。人を咬み殺して、死後、冥官に裁かれることとなり、死刑を宣告された。すると蛇が進み出て訴えて言うには、『確かに罪を犯しました、けれども功績もあります。私は（その功績で罪を）あがなうことができません』と。冥官が、『どういう功績なのか』と問うと、蛇は、『私には黄があります、病を治すことができます。活かした人は、もう数人になります』と答えた。冥界の吏が取り調べてみると、もとより偽りではなかったので、結局罪を免れることができた。しばらくして、一頭の牛を牽いてやって来て、獄吏が言うには、『この牛は人を突き殺しました。これもまた死刑に当たります』と。牛が、『私にも黄があります、病を治すことができます。私も数人を活かしました』と言うと、しばらくして、この牛も罪を免れることができた。それからしばらく経って、獄吏が一人の人を引っぱって来て、言うには、『この人は、生前人を殺したことがあるが、幸いなことに死刑を免れた。今、（生き延びた分の）寿命を天に還さなければならぬ』と。すると、その人はあわてて、私にも黄があると口からでまかせを言った。冥官はたいへん怒って、『蛇黄や牛黄が薬に入っていることは、天下の人が皆知っていることだ。お前は人間だろう、どうして黄などあるものか』と彼をなじった。他の冥官たちがかかるがわる訊問したところ、その人は苦し紛れに、『私には黄はございません。ただ些かの慚惶（恥ずかしさ）があるだけでございませぬ』と言った。」

出典は、宋代の文人孫宗鑑の『西畚瑣録』

(2012/01/14 23:52 作成 門屋温)